

岡田英弘監修

宮脇淳子・楠木賢道・杉山清彦編集

## 『康熙帝の手紙』

(清朝史叢書)

藤原書店 二〇一三・一刊

四六 四七二頁 三八〇〇円

本書は、本書の原版は一九七九年に中公新書の一冊として出版され、名著の誉れ高かったものの、絶版となり入手困難な状況にあった。このたび、著者岡田英弘が監修する清朝史叢書の第一冊として、装いも新たに世に問われることとなった。

本書は、大清帝国の支配を確立した康熙帝(在位一六六一～一七二二年)による、西部モンゴルのジュンガル部長ガルダンに対する、三度に亘る親征を中心に描くものである。ただし、単なる歴史叙述に終わるものではない。その最大の特色は、康熙帝自身が北京に残る皇太子に対して送った、満洲語の自筆の文書が中心に置かれている点である。皇帝の私信としての性格も有する、このユニークな史料が効果的に利用されることで、読者は皇帝の心の機微に触れ、読み物としての面白さも堪能することができる。

序「清朝とは何か」は、今回増補された部分で、コンパクトな大清帝国史となっており、続く本編の内容を大きな歴史の流れの中に位置づける。本編は五部から成り、まず「中国の名君と草原の英雄」では、康熙帝の即位から実権の奪取、三藩の乱、ガルダ

ンとチベットとの関係、モンゴル諸勢力間の抗争の様相などが描かれ、康熙帝が対ガルダン親征に向かう背景を理解することができる。

「ゴビ沙漠を越えて」「狩猟絵巻」「活仏たちの運命」の三部は、本書の中核をなす部分であり、一六九六年の第一次・第二次親征、一六九七年の第三次親征が扱われる。この部分で提示される皇太子へ送られた康熙帝の手紙には、行軍の具体的様相や敵であるガルダンの消息だけでなく、ゴビ沙漠やオルドスなども含め、モンゴル世界の生態や自然環境が極めて詳細に記されている点も注目に値する。また、皇帝の目に映る風景、湧き上がる様々な感情、北京に残る家族への思いといった、編纂史料からでは決してうかがうことのできない記述が、数多く見出される点も印象的である。そして最後の「皇太子の悲劇」では、親征後、手紙の受け取り手であった皇太子の失脚と康熙帝の晩年が描かれる。

全編を通じて、満洲語史料が縦横無尽に使用され、その有用性と価値の高さが感得される。そもそも清朝の支配者の言語は満洲語であり、これを等閑視できないことは言うまでもない。また、清朝・モンゴル・チベットという、内陸アジア世界を動かす各勢力の思惑が明快に叙述され、ダイナミックな歴史の流れを理解できる。改めて、中華王朝としての枠に止まらない、大清帝国の北アジア・内陸アジア世界に対する影響力を思い知らされる。

本書が原版と大きく異なるのは、史料の出典が示された点、そして杉山清彦・宮脇淳子・池尻陽子・渡辺純成による簡潔ながらも鋭い注が多く付された点である。また、補編として本書と関連

する著者の既刊論文が六点、史料編として楠木賢道・鈴木真・岩田啓介による、関連する五点の満洲語史料の日本語訳が収録されている。系図や索引も充実しており、初学者にも専門家にも有用である。本書が、東洋史学研究者のみならず、広く歴史学研究者に読まれることを期待したい。

(山本明志)